

木下長嘯子のこと

——長嘯の墓もめぐるか鉢叩 芭蕉——

浪 本 澤 一

木下長嘯（二五七〇—一六五〇）の人物とその作品については、岩本素白（一八八三—一九六一）の「挙白集を語る」の名評論に委曲が尽されている。しかもなお私見を述べてみたいと思うのは、中世の西行（一一八一—一九〇）から、近世の芭蕉（一六四四—一六九四）に至る系譜の中に、長嘯の座があるからに因る。

○

さて、文人長嘯を語るには、この人の武人としての前身に触れておこななくてはならない。木下長嘯子、俗名は勝俊、木下定家の長男で、父の妹は豊臣秀吉の室、北の政所である。若狭の国に封ぜられて八万千五百石を食んだ。関ヶ原の役には伏見城松の丸の郭を守っていたが、その牙域には徳川の家人島居元忠等があつて之を守っていた。勝俊は豊徳二氏の間にあって去就決せず、北の政所の御所を守護するためと称して、遂に郭を捨てて京に走ってしまった。役後、封を削られて東山霊山の辺りに穩棲し、長嘯子と号して悠々吟

詠を事とする身となった。その後小堀山に閑居し、慶安の初年に没した。家集を挙白集という。墓所は、洛西小堀山勝持寺にあり、また洛東高台寺にある。以上がこの人の略歴である。

菟園小説の伝える島居元忠等を棄殺したと言うのはこの時の事を指す。武人の進退としては甚だ明らかならざるもので、その累は文人長嘯子の作品の上にも及び、近世の歌界において挙白集は人気の無い書物であつたらしい。然し乍ら、その書物の人気と価値の有無とは必ずしも一つではない。菟園小説が長嘯子の風雅を難じている点は、本稿の後半において改めて取り上げ、挙白集の芭蕉に与えた影響の中で私見を加えることとする。

○

西行と定家（一一六二—一二四一）は中世を代表する歌人であるが、長く歌界の主流を形成したのは定家を祖とする歌風であつて、鎌倉時代から室町時代にかけて定家は歌界の神であつた。正徹（一

三八一—一四五九)の「於歌道定家を難ぜむ輩は冥加もあるべからず。罪をかうぶるべき事なり」(正徹物語)のことはその間の消息を最もよく語っている。然し、織田信長(一五三四—一五八二)の武力による容赦ない中世的權威の破壊は、時代の流れを中世から近世へと変える発端となる。和歌の上では実に四百年に渡って歌界に君臨した定家の偶像が破壊され、私の意識に基づく新しい和歌の生まれる機運が醸成されていくのである。窪田空穂(一八七七一—九六七)は近世和歌研究の中で、「その最も早いのは、京都の木下長嘯で、これは批評も主張もせず、一意我が好む歌を作っていたのみである」と言い、また「家集挙白集に対しては、その伝統に従はない放縱なものであるといふ点から、京都の和歌界から非難された。それに対する弁駁もあった。しかし、それだけの事で、直ちに当時の和歌界に影響するところはなかった」と述べている。そうであつたろうと思われる。長嘯には、後の真淵(一六九七一—一七六九)や景樹(一七六八—一八四三)に見るごとき歌の上の主張もなく、歌そのものも近世的に渾然たる体を成しているとは言えない。しかし、長嘯の歌は、中世の歌の空想を退け、自己の現実立っての实感をそのまま歌にしている。そこに長嘯子の近世歌界の先驅者としての名譽がある。長嘯子が心を寄せた歌人、それは中世歌界のインサイダーとしての定家ではなく、その傍流にあって隠然たる力を持続していたアウトサイダーとしての西行の存在であつた。

○
挙白集全十卷、巻の一から巻の五までは歌集で、巻の六以下は長短五十八篇の隨筆を収めている。由来長嘯子といへば歌人として挙

げられるが、実のところ長嘯の作品はその和歌よりもむしろ隨筆の方に興趣をそそるものが点在するのである。素白の「挙白集を語る」は、その隨筆のすぐれている所を犀利に論じ尽して間然するところがない。ここにはわたくしの眼に映つた長嘯觀といったものを記して行きたいと考える。

○
長嘯子の名高い山家の記は二種類ある。その一つは東山靈山の隱棲記であり、他の一つは小塩山の隱栖記である。この後の方の山家の記の中に和歌の品定めをした条がある。

世の人のよむ歌は、偽よりいで、上手の名あり。西行が歌は、あまねく修行しめぐり、遙の海山を経て、みる所のまことよりいづ。言葉口にまかせて、すがたいたはらざれども、おのづから高き風情ある物なり。古畑のそばの立木にある鳩の、友よぶ声のすき夕暮。かうかうなん。たゞ和歌はよむことの難きにあらず。こゝろを歌になすことの難きなるべし。

わたくしは、この所を読んで、文人長嘯子の和歌に寄せる見識の高さに感心したのである。武人としての木下勝俊は兎園小説の痛罵する所であるが、文人としての長嘯子の見識は確かなものである。思うに、この方、文人となるべきを誤って武人となり、そのため後代までも白い眼で見られるという芳ばしくない結果を招いたのである。上掲の文章で「世の人のよむ歌は、偽よりいで、上手の名あり」と言っているのは、中世歌界の病弊を辛辣に非難したものである。歌界一般の傾向に反して、西行の歌ばかりは「みる所のまことよりいづ」と、その歌の实感に基づいたものであることを言い、

さらに「言葉口にまかせて、すがたいはらざれども、おのづから高き風情ある物なり」と評している。西行の歌を評して「すがたいはらざれども」とある、このことは裏返してみれば、当時歌界一般の歌がいかに技巧の末に走った拵え物の歌であったかを思わせる。中世の歌界において定家が偶像化されていたということは、定家に象徴される新古今風の美が固定化してしまい、生氣を喪失して、美はすでに死んだということである。さすがに長嘯子は、定家の亡霊から醒めて、西行の実感を重んじた歌へと志向を転じている。そのことが注目されるのである。

○ 上掲の文章につづいて、次のようにも言っている。

風雅集の中に、空はれて木ずえ色こき月のよの、風におどろく蟬のひとこゑ。ありのまゝの景氣をよくうつされて、しかも人のいまだ詠ぜざるすがたいとあらまほし。

中世の歌界は、新古今集のあと何れもさましう動きもなく、旧風墨守の二条派に対して、京極派の玉葉風雅の二集が風景を詠じた写実的な歌に汲むべき新味を見せた程度である。上の歌を、写生の行きとどいた、自然観照の澄徹した歌として、長嘯子が珍重したことは理解できる。

ところで、上掲の二歌、同じく景氣を詠じた歌であっても、その意味は著しく異なる。西行は中世歌界における人生派の第一人者である。山家集の歌は西行でなくては作れないものである。どの歌にも西行の体臭が濃く染みついている。景氣の歌を詠んでも歌の背後に西行の人生が横たわっている。堂上の歌には求むべくも無い野性

のたくましさがある。風雅集の歌は宮廷歌人の雅情から出た耽美派の歌である。さすがに感覚ばかりはみがかれていて、歌は玻璃器のように透き通っている。鑑賞に値する歌ではあるが、西行の歌に見るような迫力は無い。

○ 長嘯子の山家の記は芭蕉の幻住庵記や嵯峨日記と親切な連関を持っている。ここでは山家の記が嵯峨日記に及ぼしている影響について述べる。東山靈山隠棲の山家の記に、書齋二間を設けて、一つを半日、いま一つを独笑と言ったとある。その条に、

やがて爰を半日とす。客はそのしづかなることをうれば、我はそのしづかなるをうしなふに似たれど、おもふどちのかたらひはいかでむなしからん。

とある。芭蕉はこの一章を採って、

独り住むほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰く、客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふと。素堂この言葉を常にあはれぶ。

と記している。芭蕉ひとりに限らず、芭蕉一門の排諧者の間に拳白集の愛読せられたことがわかる。さて、ここでわたくしの言いたいことは、元禄の芭蕉をして引用せしめたこのめでたきことばは長嘯子の發明によるものであろうか、という一点である。わたくしにはどうも然うではないらしく思われるのである。

五山禅刹随一の学僧と言われる虎関師練（一二七八—一三四六）の詩文集に済北集がある。その巻第三、律詩の一、漫興と題した詩中に、

半日君閑^{ハルヒキミ} 半我忙^{ハルミヤ}

の一句がある。長嘯子の文章はこの句を和文にやわらげたものと推せられる。かれは書斎二間に、漢籍一千五百卷、和書二百六十部を集めていたというから、虎関の済北集など五山禅僧の詩文集は是を読んでいたことがじゅうぶん考えられる。

○

滝沢馬琴（一七六七—一八四八）が同好の文人たちと相会し、各自が筆録してきて披講した奇事異聞を集めたものが世に兎園小説と称するものである。その中に馬琴の筆に成る一話がある。それは寛政の三奇人の一人蒲生修静（一七六八—一八一三）が山陵調査を志して京都に上り、歌人の小沢蘆庵（一七二三—一八〇一）の許に身を寄せていた時の話で、広く人口に膾炙している。客は日々古陵を尋ねて出かけるのであるが、主はその志に感じて毎晩風呂を焚いて待っている。いつも遅れがちな客の帰りが、ある日、夜半に至ったのを見て、主は遂に黙しかねていささか怨言を呈した。客は大いに恐縮して陳謝し、その日の次第を語り出す。古陵を尋ねて目的を達せず、たまたま等持院に足利尊氏の墓所を見かけ、年来の恨みが遽かに発し、その墓を杖を挙げて打ち、門前の酒屋に立ち寄り、怒りに任せて飲む程に忽ち六七合を尽し、遂に酔うて脚も定まらず、木の株に腰を掛けているうちに、思わず熟睡して斯くは遅くなったというのである。それを聞いて、主は吹き出し、自分にもまたそれに似た事があると語る。その話を兎園小説は次のごとく記す。

われも亦往ぬる年、ある日靈山のほとりに逍遙して、長嘯子の墓を過ぎし時、さすがに宿恨無きにあらねば、行きもえやらず

眠まへて、長嘯子不滅の罪あり、わぬし自ら之を知るや。わぬしは豊太閤の外族として位高く且采地も広かるに、心ざま武士に似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て鬼胎を抱き、鳥居元忠等を棄殺しにせしは不義なり。事平ぎて罪を蒙り、僅に命を助けられしを幸にして恥を知らず、心にもあらぬ世捨人顔して、えせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調べの悪くなりて今に至るまで直らぬは、これ不滅の罪にあらずや、冥罰かくの如くならんと罵りながら、杖を挙げて墓を殴ちたる事ありけり。

老歌人蘆庵が遙かに年下の修静を客人として世話をしたのは古陵訪求の志に感心したからであって、両者には年齢を超えて意気すこぶる投合するものがあったのである。蘆庵の肌合からすれば長嘯子は武人の風上におけぬ人物としか映らなかったであろう。然し乍ら、蘆庵の「えせ歌多く詠じたる」という評は文人長嘯子を惡しざまに罵っただけのことで、挙白集の全貌を青眼に読んだものではない。その和歌は、堂上家の膝元の京都において和歌革新の第一声を放ったものであって、実感を自由に写生した歌には、堂上の歌から地下の歌への展開の跡が見られる。しかも挙白集は、歌よりも隨筆の方に、歌人としての高い見識を示したもので、他の歌人には求められないような興趣を呼ぶものが散見するのである。この点については既述したところであるが、さらに長嘯子の影響が芭蕉の風雅に及んでいることに就いて言及しておく。

○

挙白集、卷十に「はちたゝき」と題する文章がある。

いづより有りとも知らぬ古きなりひさこの器、持払の具に得たり。おのづから茶湯の水指によろし。また花を活け、くだものを盛る。一物三用にたる。蓋の裏には異様な人がた有り。空也の遺弟とかいふなる。因りてこのものをはちたゝきと名づく。いつも冬になれば、寒き霜夜のあけがた、なにごとにかあらん、高くのゝしりて大路をすぐる。かれが声いと堪へがたく、めざめてふと聞きつけたるは、卯の花のかげに隠るゝ心地す。

はちたゝきあかつきがたの一声は冬の夜さへ鳴くほとゝぎす鉢叩は市。聖。空也上人（九〇三—九七二）の遺弟と名のる寒中修行の徒を言う。空也忌の十一月十三日から四十八夜の間、洛内洛外の三昧堂を、瓢を鳴らし、空也念仏を唱えて巡り歩いた。文中「卯の花のかげに隠るゝ心地す」とあるは、鉢叩が、寒き霜夜の曉方、空也念仏を唱えながら相連れて過ぎる、その乾びた声の侘ひしさを卯の花の陰に鳴く杜鵑の声に喩えて、堪えがたい心地にならされると言つたのである。この一章には、地下の歌人としての長嘯子の面目がさながらに現われていて興趣をそそる。近世の歌人を通じて、鉢叩の侘びたる風情に心を寄せた歌人は、おそらく長嘯子のほかに無いであらう。それは俳文の走りともいふべき味わいを帯びている。

この文章を読んで思ひ起されるのは風俗文選に収められている過去の鉢叩の辞である。それは元禄二年師走の二十四日、芭蕉翁が嵯峨の落柿舎に在って、鉢叩を聞いた折りのことを綴つたもの。その夜は、風のはげしく、小雨さえ降って、待つ鉢叩もすぐには影を見せない。しかし「打ち解けて寝たらんは、かへり聞かんと口惜しかるべし。明かして社との給ひける」とあって、待ち侘びる程に曉方

に至り、

横雲のかげより、からびたる声して出で来たり。げに老いばれ足よきものは、友どちにも歩み遅れて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の

長嘯の墓もめぐるか鉢叩

と聞え給ひけるは、この曉の事にてぞ待りける。

このように「鉢叩の辞」は記している。古人も言及しているごとく長嘯子の「はちたゝき」を典拠として翁の句がある。寛政七年に成つた信風の「笈の底」は、長嘯の前掲の歌を挙げて「凡そ洛中洛外に其名聞えたる隠士等の墳墓多し。何れを指して云ひ出でても其意同じやうなれども、この歌あるを以て長嘯と云ふ。是不動して言外其余情至って深々たり。可貴の吟と云ふべし」と評している。うなずくに足る評である。

元禄の芭蕉が関心を寄せたのは文人長嘯子であって、武人木下勝俊は昔物語の中の人に過ぎなかつた。俳諧者芭蕉と歌人蘆庵の長嘯観を対比してみると、両者の視点の著しい懸隔に驚かされる。しかも蘆庵の生涯は芭蕉の没後一世の後である。近世において俳諧が早く庶民性を獲得して、精神的に自由な世界を開拓したのに比べて、和歌は敷島の道としての保守性を長く持ち続け、そこから開放された庶民性を獲得するのは明治時代に入ってからである。もとより近世和歌として新しい展開はあり、蘆庵も京都の搢紳家の歌に對して「ただ言歌」を主張し、和歌革新に一時期を画している。しかし、それも古今集の権威を背景においてのこと、芭蕉が「俳諧に古人なし」という主張のもとに蕉風の俳諧を創始したのとは比較にならない程のことである。